

第一五号に寄せて

吉見 孝夫

第一五号をお届けします。前号の今村浩子氏の調査には励ましのお言葉をいくつか頂戴いたしました。私からも感謝申し上げます。

今号の二編は、読んでいただければおわかりのとおり、府川源一郎氏の著書を頼りにして、ここ数年書き留めておいたメモをまとめて整理したものです。情報を収集し、まとめ上げるとなれば、これはコンピュータの得意分野です。人間の仕事はそれを文章化するだけです。そう思っていたら、生成AIとやりに頼めば、文章にするのもコンピュータがしてくれるようです。今回手がけた資料はコンピュータが扱える形にデータ化されてはいないようですので、私個人が、資料に当たり、データを集め、それをまとめて文章を整えるといった作業を行わざるを得ませんでした。数年がかりでしたので、文献の解説に精粗があったり、記述の形式に不統一が見られたりといった凸凹が現れてしまいました。何とか整然とした形にしようと思いましたが、やってみるとときりがありません。途中で断念し、必要な情報が欠けていないか、誤りがないか、この二点だけをチェックして済ますこととしました。こういった問題も生成AIなら難なく解消してくれる

るでしょう。

コンピュータといえば、いわゆるくずし字を解読してくれるアプリケーションソフトが「ふみのほ」「みを」などいくつかあるようです。私は使ったことがありませんが、この助けがあれば、読めない人に役立つのは勿論のこと、読める人にとっても入力する手間が省けそうです。ただ得意不得意があるようです。あるソフトを使った結果を見せてもらいましたが、余り芳しくありません。熟練者なら自分で読んで入力した方が手間がかからないし、初心者ならどこが正しくてどこが誤りなのかわかりません。もともと、文字の切れ目がはっきりしていて、字形も一定である古活字版なら成績もよいようです。いずれにしろこの分野の技術は秒進分歩の世界ですから「たいしたことない」とたかを括っていられるのも今のうちだけにちがいません。

大学や研究機関に所属しない方の緻密な研究をいくつかにしました。翻って大学教員はどうか。世に大学生の常識知らずを啗う言説が溢れています。私には学生より教員の方が気がかりです。以前、タイトルだけには英訳を付けるという雑誌の編集に携わったことがあります

す。ある方のタイトルで「女性たち」が *womans* と訳されているので、訂正してもらった記憶があります。またある国立大学の学長が関係者に送った長文のメールの最後に「ここまで拝読してくださり、感謝いたします」とあったのには面食らいました。もつともこの類の「拝読」は蔓延しているようで、先年も大学で国語科教育学を講じている方から送られた印刷物に添えて「ご拝読をお願いいたします」とありました。「そういうオマエはどうなのだ？」と問われれば、「鶏頭となるも牛後となるなかれ」と口走ったことがありますので、まあ五十歩百歩だという自覚はあります。

最後に軽い話題を一つ。イソップに関する回文を見つけました。ただしフランス語です。

Esape reste ici et se repose.

「イソップはここにとどまって休む」といった意味でしょうか。アクサンテギュの有無は無視してよいようです。日本語ではどうか。「イソップ」だと「プッソイ」という音列、文字列は考えにくいので諦めました。「イソホ」ならいとも簡単にできます。

軽いイソホと仔猫と細いイルカ。

お気づきの方もいらつしやるでしょう。コピーライター土屋耕一氏の名作「軽い機敏な仔猫何匹いるか」をヒントにして作りました。拙さをご容赦ください。「イソホは細い」からならいくつも派生形が作れます。

イソホもハハも細い。

「ハハ」を「チチ」「ババ」「ヂヂ」に置き換えてもで

きます。いつそまとめてもいいです。

イソホもハハもチチもヂヂもババも細い。

これは回文ではないけれど、逆に読んでも意味が変わらないという珍しい例になります。濁点の有無を無視してよいなら回文になります。「ヂヂ」と歴史的仮名遣いにしたのがミソです。これだとイソホ家は痩せ型の家系となり、『伊曾保物語』が描く「顔かたち、色黒く、両の頬うなたれ、首ゆがみ、せい低く、足長くしてふとし。せなかかゞまりて、腹ふくれ出でて、まがれり。」というイソップのプロフィールと合わないのがいささか残念です。もつとよいのをお作りになった方はお知らせ願います。